母の甜き乳 ―日本霊異記の女性―

守屋俊彦

一

日本霊異記下巻第十六縁にはこのような女性が登場している。寂林法師は求道のために諸国を行脚し、越前の国加賀の郡畝田の村にやって来た。そして光仁天皇宝亀元年十二月二十三日の夜に夢をみた。彼が法隆寺の付近を歩いていると、路傍に裸衣の女が蹲まっていた。みると「両つの乳腫れ大きにして、竈戸の如く垂れ、乳より腺流る」といった状態で「痛き乳かな」といいながらうめき苦しんでいた。彼が「汝は何ぞの女ぞ」と問うたところ

我は越前の国加賀の郡大野の郷畝田の村なる横江臣成人が母なり。我齢丁なりし時、濫しく嫁ぎ、邪婬にして、幼稚き子を棄て、壮夫と倶に寝ぬ。多の日を逕て、子乳に飢う。ただ子の中に、成人甚飢う。先に幼き子を乳に飢えしめし罪に由りての故に、今乳の眼るる病の報を受く。

と答えたという。この女は自分の子に乳を与えなかったために、乳が腫れ痛んでいるのである。母が子に乳を与えるのは、母としての義務である。義務というよりか、人間としての自然な行為というべきであろう。本能である。それを捨てたために、この女は報を受けているのである。霊異記の報は直接的である。精神的に悩んだり、物質的に困ったりするような、間接的でなまぬるいものではない。目には目、歯には歯である。兎の皮を剥いでいた男は、体中に腫物ができ、皮膚がただれて死んでいるし（上十六）、馬をこき使って涙を流させた石別という男は、釜の湯で両目を煮られている（上二十一）。報も古代的なはげしさがある。この女は子に乳を与えなかったので、まさに乳そのものに報を受けたのである。まことにきびしい。それどころではない。この女は「いまだ丁なる齢を尽さずして死に」と若死にしている。母が子に乳を与えないことは、とりもなおさず、子を殺すことになる。だから、死の報を受けているのである。そして、当然なこととして地獄に堕ちている。この女が蹲まっていた法隆寺付近の風景を「その道鏡の如く、広さ一町許り、直

きこと墨縄の如く、辺に木草立てり。」と描いている。冷え冷えとして無気味な映像である。これは地獄を訪れた者が、そこの路について「行く路広く平に、直きこと墨縄の如し。」（中十六）と語っているように地獄独特のものなのである。ここでは地獄は観念的なものではなく、まさに現世に出現しているのである。鳥の卵を煮て食っていた男は、麦畑が地獄の火の山となり、その中で焼け死んでいる（中十）。この女はまさに悪報を受けているのである。

それならば、何故この女は母としての義務に背くようなことをしたのであろうか。それは、この女自身が語っているように「濫しく嫁ぎ」「壮夫と倶に寝る」ためであった。愛欲のために子を棄ててしまったのである。つまりは、邪婬であり、当然受けるべき報を受けたといえよう。一体、霊異記では愛情そのものは必ずしも否定されてはいないのである。栗田朝臣の女は、自分の病を治してくれた東人を恋い慕い、恋しさのあまり牢に入れられた東人の側を片時も離れなかったし（上三十一）、狐が化けた女ではあったが、去って行った妻を恋した男の恋歌が載せられたりしている（上二）。ここにみられるものは、男女の愛を汚れたものとして否定しがちな、後世の仏教観とは相違している。むしろ、記紀の世界に近い。記紀では男女の愛は透き通るように明るく、自然なものとして肯定されている。ところで、この女の行為は、一見愛に生きた記紀の女性に似ているようなところがあるが、実は、根本的な点において相違している。それは人間的な愛を切ってしまっているからである。男女の愛から母子の愛へ進むのだったら問題はなかったのだけれど、この二つが並んであり、前者のために後者を捨てたところに誤りがある。男女の愛は人為的であり、母子のそれは自然なものである。切っても切れないものである。この切っても切れないものを無理に切ったところに、愛が愛欲に堕落してしまっているのである。ここでは仏教の観点から罰を受けてはいるが、人間としても当然報を受けるたちのものである。悪女というべきであろう。しかし、そこに一抹のあわれをも感ずるのである。この母についてその後娘は「実に語るが如し。我等が母公、面姿姝妙しくして、男に愛欲せられ、濫しく嫁ぎて乳を惜しみて、子に乳を賜はらざりき」と言っている。ここには美貌である女性の悲劇がある。美貌であるが故に「男に愛欲せられ」てしまったのである。美貌は女性の生命であり、誇りでもあろう。しかし、そのために人間としての心の軸が狂ってしまったのである。何時の世にも変わらぬ、美しき女性の宿命ともいえよう。その狂った女の愛を乳によって象徴しているところが如何にも古代的である。母と子は乳によってしっかりと結ばれている。それは自然のままであり、その愛はもっとも純粋なものである。それが男女の愛欲によって汚されている。だからこそ胸の流れる乳になっ

ってしまたのである。乳から腹が流れているところに狂った愛が端的に表現されている。古代的といえよう。

さて、この女は自らの行状を隠すところなく語っている。それは告白ともいうべきものである。しかも、その語っている相手は寂林法師という僧である。そして、この僧は奇しくも自分の住んでいた畝田の村に来ているのである。それは仏のみちびきというべきものであろう。従って、これは仏にたいする懺悔ということにもなるのである。当然仏によって救われなければならない。本来ならばここで寂林法師が経を読み、仏に祈って救われるところである。ところが、ここはそのようになっていない。女はいう、「成人知らば我が罪を免さむ」と。成人はこの女の子供である。乳を与えないで飢えしめた子である。この子によって直接救われたいというのである。母が地獄に堕ちていることを知った子供達は「我、怨を思はず。何ぞ慈母の君、この苦しみの罪を受くる」といって、造仏したり、写経したりして母の罪を贖った。これと同じような話が上十にもある。子供の稲をひそかに取っていた父は牛になっていた。この父は子供の「先時の用ゐる所は今ことごとく免し奉らむ」ということばによって成仏している。親と子、とりわけ、母と子は血でつながっている。子供にとっては、いくら悪い母でも、母は母なのであって、「慈母の君」なのである。そこには憎しみを越えた愛がある。子供の愛によって母の罪が洗い落されるというのは如何にも人間的である。すがすがしい。それはもはや仏教以前の世界である。そこには記紀に通ずる自然なものがある。そういえば、「我、怨を思はず」ということばによって救われるというところにはホカヒ的なものがみられないこともない。古代人はことばに呪力を信じていた。ホカヒはそのことば通りに良い結果が生ずる場合をいう。稲羽の素兎の「この八十神は必ず八上比売を得じ。倚を負へども、汝命獲たまはむ」ということばによって大国主神は八上比売を現実に手を入れている。こうしたところにもまた古代的なものがあるといえよう。

二

ここにもう一人の母がある。成人の母が迷える母であるのにたいして、きびしくはげしい母である。上二十三の話である。孝徳天皇の代に瞻保という学生がいた。大和の国添の上の郡の人である。儒学を勉強していた。儒学の理念の一つは孝である。しかるに瞻保は稲を借りた母を「遮め欲」り「母、地に居り、于胡床に坐り」というような有様であった。子として母にたいしてとるべき態度ではない。つまり、彼は「徒らに書伝を学」んでいるのであって、いわ

ば、教養と行動とがバラバラになっているのである。知識人によくみられるタイプである。憶良は「父母を敬ふことを知れども侍養を忘れ、妻子を顧みずして脱履よりも軽んじて自ら異俗先生と称する知識人を「石木より成りでし人か」（万葉集、八〇〇）と痛烈に批判している。当時このような軽薄な人物がいたのであろう。友人達があれこれと忠告したが、瞻保は「無用なり」といって拒否してしまった。みかねた友人達が母の償を払い、その場を去ってしまった。その時母は「その嬬房を出し、悲しみ泣き」このように言っている。

吾が汝を育つる、日夜怠ふこと無かりき。他の子の恩に報いるを観る。吾が児のかくの如きを恃みて反りて道め辱めらる。頗はくは心の違い謬らむことを。汝すでに負の稲を徴る。吾もまた乳の直を徴らむ。母子の道、今日に絶ゆ。天知る地知る、悲しきかな痛きかな。

これはまことに衝撃的なことばである。母が子に乳の代を要求したなどということはきいたことがない。成程、子供が「負の稲を徴」ったのだから、母もまた「乳の直を徴」るというのは理屈かもわからない。しかし、母が子に乳を与えるのは無償のものである。子がその恩に報いるのも自然の結果である。母の子との間には愛があるのみで、計算などはない。それを切り出している母のことばはまともには読めないような気がする。しかし、これは母子の縁を切るということをどぎつく直接的に表現したものなのではないだろうか。母と子とは乳によって自然に結ばれている。それは貸借の対象となるものではない。その乳の代を求めるということは、つまりは、「母子の道、今日に絶ゆ。」ということになろう。従って、これは縁を切ることの古代的表現だったともいえる。しかし、この時の母の気持はたんにそれだけのものだったのであろうか。そこで、ここのところを今少し注意してみたい。この時母は「悲しみ泣き」「悲しきかな痛きかな」といっている。ここにこの母の本心をちらりとみる思いがするのである。それは母の号泣である。この号泣の中に彼女の母としての愛を汲みとるべきではないだろうか。母にとっては出来の悪い子供ほど可愛いという。瞻保はそんな子供だったのであろう。その愛がここでは逆説的な表現となっているのである。しかも、それを乳によって直接的に言っているために衝撃的な印象を受けるのである。母が子供の前に「嬬房を出」しているのはいかにもどぎつい感じがするが、いってみれば、そこに裸のままの古代の女性があるといえよう。この大胆なポーズの中に、実は、この母の深い愛と無限の悲しみとを読みとるべきであろう。ここには古代の女性らしい、はげしくきびしい姿勢がある。

この瞻保の母を理解するためにもう一人の母をだしてみたい。そ

れは中三の吉志大麻呂の母である。大麻呂は武蔵の国多麻の郡鴨の里の人である。聖武天皇の代に防人となり遠く九州に派遣された。母は連れて行ったが、妻は同伴することが出来なかった。そこで彼は「妻の愛に昇へ」ないで、「我が母を殺」し、その喪服によって兵役を免れ、妻のもとに帰ろうとした。彼について霊異記は「悪逆の子」としているが、本当は気が弱く人の良い人物ではなかったろうか。ここには、国家への忠誠、母への孝、妻への愛、この三つのものに挟まって、ぎりぎりのところに追いつめられた人間の悲劇がある。それはともかくとして、彼は東の方の山中で法会があるからと偽って母を連れだした。そこで突然に横刀を抜いて殺そうとした。母は驚ろいていろいろと諭したが、彼はきき入れなかった。母は子供の犠牲になろうと決心し、自分の着ている衣物を遺品として渡し遺言した。大麻呂がまさに母の頂を殺らんとした辟間に大地が裂け、彼は地獄の底に堕ちて行った。仏罰である。その時母は「陥る子の髪を抱」き「我が子は物に託ひて事を為す。実の現し心にあらず。願はくは罪を免し賜へ」と言っている。この子は自分に横刀を向け殺そうとしたのである。稲を徴った瞻保どころではない。そんな子にたいしても母は、これは本心ではない、悪魔が付いたのであろう、と嘆願している。そこには、悪い子ではあるが、なおかつ、わが子を信じようとする、母の無垢の愛がある。わが子の髪を取って必死に留めようとしている母の姿に、本能的とでもいいたい愛をみることが出来るのである。すれば、あの瞻保にたいする母のことばも古代的なものを通しての逆説的な表現とみておいてよいだろう。

そこで、こんどは瞻保が罰を受ける番である。霊異記は現報を説くことを目的としているのだから、その点からも当然報を受けなければならない。霊異記は次のように続けている。

瞻保ここに言はずして、起ちて屋の裏に入り、出挙の巻を拾ひ、その庭の中に皆焼き滅す。然る後に山に入り、迷惑ひて為むすべを知らず、髪を乱り、身傷き、東西に狂ひ走り、また還りて、行路を行き、己が家に住まらず。三日の後、忽然にして火起り、内外の屋倉、一時に皆焚く。遂にその妻子等をして生活くること能はざらしむ。瞻保悪るところ無く、餓え寒りて死にき。

気が狂ってしまったのである。霊異記からすれば「現報遠からず」ということで仏罰ということになろう。勿論、そう解釈してよいのである。しかし、これは前の母のことばの中の「願はくは心の途ひ謬らむことを」に応じているのである。お前なんか気違いになればよいという母のことばによって、瞻保はその通りに気が狂ってしまったのである。(1) 母がわが子をこのようにのろうのはまことにむごい感じがする。しかし、そこには乳の代を要求しているのと同様に母

の複雑な気持がじかにでているものとみるべきであろう。従って、ここは仏罰ではない。仏罰によらないで直接母ののろいによっているところが如何にも古代的である。古代的といえば、この母のことばは、実は、トコヒなのである。トコヒはホカヒなどと同じように、ことばに呪力を認めるものであるが、悪い結果をもたらす場合をいうのである。その代表的なものとしては応神記の秋山の下氷壮夫と春山の霞壮夫の話がある。二人は兄弟であるが、兄が弟に、お前が伊豆志袁登売を手に入れることが出来たなら、私の衣物を譲ったり、たくさんの酒をつくったりしようなどと賭をした。弟は母の助けによって見事に嬢子を手に入れたが、兄は約束を守らなかった。そこで母はその兄を恨んで、石に塩をまぜ竹の葉に包み「この竹の葉の青むが如く、この竹の葉の萎ゆるが如く、青み萎えよ。またこの塩の盈ち乾るが如く、盈ち乾よ。またこの石の沈むが如く、沈み臥せ。」とのろわせたところ、兄はその通りに病気になり、衰えてしまったというのである。(2) これと瞻保の話では、条件が少し異なってはいるけれども、母が子をのろうという点では軌を一にしている。古代人は一般に呪の世界に住んでいた。特に女性は多少なりとも巫女的であった。だから、母が子を呪ったからといって別に不思議はないのである。それは怒りの古代的表現だったのである。瞻保の母の中には、まさに古代の女性そのものが息づいているのである。

三

最後にもう一人、母らしい母を登場さしてみたい。子供が甘えてみたいと思うようなやさしい母である。中二の信厳禅師の妻である。

大領の妻もまた血沼県主なり。大領捨つるも、終に他の心無く、心に貞潔を慎む。ここに男子、病を得て命終る時に臨み、母に白して言はく「母の乳を飲まば、我が命を延ぶべし」といふ。母、子の言に随ひ、乳を病める子に飲ましむ。子飲みて歎きて言はく「ああ母の甜き乳を捨てて我死なむか」といひて、すなはち命終る。然して大領の妻、死にし子に恋ひ、同共に家を出で、善法を修し習ひき。

まことに感動的な話である。これにはこの前に夫の信厳禅師の出家のいきさつが語られている。信厳禅師はもと血沼県主倭麻呂であり、和泉の国泉の郡の大領であった。官僚であり、この地方の豪族であった。家の門の前の樹に鳥が巣を作り、児を産んだ。夫の鳥は妻や児のために食を求めて飛んで行った。その間に妻の鳥は他の雄鳥と一緒になって飛び去ってしまった。そこで夫の鳥は児鳥を抱いているうちに食が無くなって死んでしまった。大領はこの様子をみ

て、この世の愛の空しさを悟り、妻子や官位を捨てて出家し、行基大徳について仏道を修めたというのである。この後にこの妻の話がでてくるのである。同じように出家の話であるが、この二人のそれを比べてみると、その動機の純粋さときびしさにおいて差がある。大領のは観念的である。仏教の理念からそのままにでてきたような話である。いわば、教科書的である。それにたいして、妻のは現実的である。そこには愛する子を失った母の深い悲しみがあり、切実感にあふれている。まさに死なんとする子は母にたいして「母の乳を飲まば、我が命を延ぶべし」といっている。薬ではない、母の乳を求めているところが、何んとも感動的である。乳は母の愛の象徴である。子供は何よりもあたたかい母の愛を求めているのである。そこで母は「乳を病める子に飲まし」ている。神や仏に祈らないで自らの乳を飲ましているところがまことに人間的である。母は愛のすべてを乳に注いで子を救わうとしているのである。瀕死の子に乳を飲ませているポーズに彼女の愛のすべてがある。子供は最後に「ああ母の甜き乳を捨てて我死なむか」といって命終っている。このことばには、母の愛への感謝や甘えや、それを失わなければならない悲しみが、一つに凝集されて語られている。彼の朦朧とした意識の中に、無心に母の乳を吸った、幼い日のことが思いだされているに違いない。まさに「母の甜き乳」なのである。そこで母は出家したのだが、これは子を失った故の無常からではなく「死にし子に恋ひ」とあるように母の愛に生きるためとした方がよい。彼女は出家することによって子への永遠の愛に生きたのである。ところで、古事記をみると、大国主神が手間の山本で焼け死んだとき、その母は「天に参上りて、神産巣日之命に請」したところ、「すなはち蚶貝比売と蛤貝比売とを遣はして、作り活かさしめたまひき。ここに蚶貝比売、刮げ集めて、蛤貝比売、待ち承けて、母の乳汁を塗りしかば、麗しき壮夫に成りて、出で遊行びき。」とある。乳は生命の泉である。すれば、乳に生命を復活させる呪力があると信じられていたのではあるまいか。大領の妻が乳を飲まし、子がそれを求めた背景には、或はより古代的な呪の世界があるのかもわからない。何れにしても、ここにでてくる母は、何時の時代にも変らぬ、やさしい母であり、母と子は、乳という、もっとも根源的なものを通してしっかりと一つに結ばれているのである。古代的ともいえよう。

霊異記は娑婆の文学といわれる。仏教の書でありながら、娑婆のさまざまの相が描かれている。善人もいれば悪人もいる。貧や飢えに苦しむ人や愛欲に狂う人がいる。そこには娑婆の人々のうめき声がある。[3] ここには三人の母に登場してもらった。迷える母があり、きびしい母があり、やさしい母がある。彼女等は三人三様の生き方をしているのだが、それが何れも乳によって象徴されているところ

に古代をみるのである。一体、霊異記にはさまざまの女性がでてくるのだが、その多くは「九の子を産生み、極めて窮しきこと比無く、生活ふこと能はず。」（中四十二）とあるように、貧しく、しかも、多くの子供を抱えた母親達である。そして「我が命を惜むにあらず、一我が子の命を惜む。一旦に二人の命を亡さむ。願はくは我に眼を賜へ」（下十一）というように子供等のために必死に生活をし、仏に祈っている。しかも、きわめて特徴的なことは出家していないということである。信厳禅師の妻の場合は、夫が出家し、子をも失ったという条件があって特例である。多く女達は生活の泥にまみれながら、強い信仰を持ちつづけている。豊かな生活に恵まれながら、恋に破れたからといって、すぐに出家してしまう王朝の女性とはまるで違っている。従って、当然なこととして善女が多い。悪女といえば、酒を氷で割ったり、斤をごまかしたりして、仏罰により牛になった、田中真人広虫女（下二十六）のほか二、三あるにすぎない。それは後の仏教で女性を罪深きものとする思想とは相違している。[4] そこには仏教以前のものがある。つまりは、記紀の世界である。古代女性は太陽であったという。まことに霊異記にでてくる女性達は太陽のごとく明るく生き生きとしていて強靭である。からっとしている。この三人の母も、仏教という衣を着けてはいるが、いまだ古代の世界に生きている人達なのである。

なお、一言付け加えてみたい。景戒の伝記については資料とすべきものがない。ただ下三十八のところに家庭環境がやや描かれている。「俗家に居て、妻子を蓄へ、養ふ物無く、菜食無く、塩無く、衣無く、薪無し。万の物毎に無くして、思ひ愁へて、我が心安からず。昼もまた飢ゑ寒え、夜もまた飢ゑ寒ゆ。」「十二月十七日をもて、景戒が男死す。」とあるのによれば、きわめて貧しい生活をし、妻や子があり、その子を失う不幸にあったりしている。両親や兄弟などについては記していない。しかし、霊異記の中の多くの女性が貧しい母であり、信厳禅師の妻の話などからすると、或は彼自身が小さくして母を失ったか、生別して、母の愛に飢えていた人であったかもわからない。この信厳禅師の妻の話にしても、中二の話には必ずしも必要ではないのである。大領の出家の話だけでよいし、その方が話としてはうまくまとまるのである。無理に割り込ませているという感じもするのである。松浦貞俊氏が「倭麻呂の無常の感じ方が、あまりに素樸なのと、其妻の出家の動機の自然さとを比べ読むと、一聯の物語ではない様にさへ見える。[5]」といわれている通りである。こうした構想を敢てとっているところに、この話に感動している景戒をみることは出来ないだろうか。この話を取り上げずにはいられなかった何ものかが彼の心の中にあったのではあるまいか。すれば、母の甜き乳を求めているのは、案外に景戒自身であったか

もわからない。母のことを「慈母の君」（下十六）「嬰母の君」（上二十三）と表現しているところに、そうした景戒の気持がいみじくもでているような気もするのである。しかし、これはあくまで想像にしかすぎない。

注（1）ここのところを角川文庫本は「願ひし心違ひ謬れり」と訓じ、大系本も「願ひし心は違ひ謬れり」としている。すぐ上の文章に付けての訓であり、たしかにそれで十分に意味が通ずるのであるが、このような訓がでてきた背景には、全書本のような訓にしたのでは、母の子にたいすることばとしてはきつすぎるという気持があったからではないだろうか。しかし、これはこの後の磐保の行動と結びつけ、トコヒとした方がよいように思われるし、そこにこそ古代があるので、今は全書本の訓に従うことにした。

（2）倉野憲司博士　呪術の文学（「上代日本古典文学の研究」所収）二十七頁―二十九頁

（3）板橋倫行氏　娑婆の文学―霊異記覚書―「文学」第二十一巻第十一号　五十七頁―六十頁

（4）これについては中村恭子氏が詳しく論じられている（「霊異の世界　日本霊異記」第三章の二、「母性と力」）。この小論はこの中村氏のすぐれた説に触発されて、私なりの解釈をさらに展開させてみたものである。つまり、仏教という衣を着た霊異記の女性の中に、記紀の女性像を描いてみようとしたものである。記して謝意を表する次第である。

（5）松浦貞俊氏　日本霊異記　続日本古典読本　七十二頁　付言